男井間池（おいまいけ）

位　置　図

諸　　元		
貯　水　量	956	千m3
満 水 面 積	32.0	ha
受 益 面 積	188.4	ha
堤　　高	9.7	m
堤　　長	290.0	m

男井間池（めいま）は東側の女井間池と並んで一対の池を形作っており、昔「雄沼（おぬま）」と呼ばれ、池戸（いけのべ）という地名もこのため池からきているといわれています。「男井間池之碑」によれば、池の築造は大宝年間（701～704 年）から弘仁年間（810～824 年）のころと推察され、1,200 年も前のことと記されています。

ため池の中ほどに残っている堤から推測すると、造られた当時は今の半分足らずの規模であったようですが、拡張された記録は明らかではありません。

かつては鴨部川から 6,300 間（約 11.3ｋｍ）の掛け井手（導水路）を作り導水していましたが、距離が長く勾配がゆるいため、手入れや見回りに多くの費用がかかる割に十分な水は得られませんでした。また、池敷の半分は草が生え「贅沢な牛飼場」といわれるほどになり、せっかくの水田も畑にするしかない状態になっていました。

そこで井上村（現三木町井上）の百姓恒八は、水源を近くの平木川（新川）に変更することによって、掛け井手を 950 間（約 1.7km）に短縮し、古い掛け井手跡を水田として開拓するという一石二鳥の計画を立てるとともに実地の測量を重ねました。そして、高松藩の工事許可を得て、天明 5 年（1785 年）に新しい掛け井手を完成させました。高松藩は恒八の功績を賞し、報米として毎年米４石を給し、以後庄屋格としました。農民の喜びも大きく、恒八に報酬を贈り、井手守を委嘱しました。この井手守の役は亘八の子孫に受け継がれ、今日に至っています。

先人の苦心によって男井間池は徐々に完成はしましたが、日照りによる干害を何度も経験しなければなりませんでした。これらの経験から、戦後の昭和 23 年（1948 年）に新川の水を電動式揚水機で直接くみ上げるようにしました。また、香川用水からも配水を受けて安定した貯水を確保できるようになりました。

讃岐富士・白山を望む男井間池

堤防に立つ改修記念碑